

まんだら通信

第184号(通巻215号)

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口 1084
真言宗智山派 天香山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL.0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org

平成23年(2011)10月 佛誕2577年 皇紀2671年

たのくる開帳

今年卯年。

十月一日から十五日まで、江戸時代に朝夷郡と言われた和田・丸山・千倉・白浜の、大字滝口の一郷の四町にまたがる百観音さまの、『田の畔巡礼』です。我が国は弥次喜多道中でもご存知のように、昔から普通の人が安心して長旅できる、治安の良きで世界でも珍しい国でした。

そうは言うものの、西国四国への巡礼という、誰でもおいそれとできたわけではありません。

ですから、気の合った同士が富士講・伊勢講・大山講・成田講などという講中を作って、毎月僅かの小遣いを講元さんに預け、費用が貯るとくじ引きをして何人がみんなの代りに代参しました。次の年は、以前お参りした人たちはく

じ引きに加わりませんから、みんなが遠からずお参りできることになりすね。『無尽講』や『頼母子講』と言う、なかなか夢のあるやり方です。

然し、もつと身近に観音さまの御利益に与る方法はないものだろうか、と考えた熱心な人がいたのです。

そうしてできたのが、『たのくる巡礼』で、西国・秩父・坂東合わせて百ヶ所のミニ観音霊場を、房総半島の南端に写しました。

車で三十分も走れば通り抜けてしまう、そんな狭い地域に百ヶ所の霊場ですから、普段は集落の人しかお参りしないようなたのくる道の向こうの小さな念仏堂なども霊場になります。

昔、そんなお堂でも、大抵は『堂守』と言われる人が住んでいました。

お寺の過去帳を見ると、この人たちの出身地は東北地方が多かったことがわかります。もとは、今で言うホーム

レスさんですが、村々を流れ歩いて南房総に来てみたら、村人の人情の厚いことに加えて四季温暖

で、冬も滅多に霜が降らず、野に出ればいつも青々とした野草があり、潮が引いた磯に行けば何かしら食べ物があります。

汗のしみ込んだ、畳代わりの蒲まで食べたという東北地方の飢饉から逃れてきた、こういう人たちはしてみれば極楽だったのではないのでしょうか。

お堂の中や庭の掃除をしたり、墓地の草取りをしている内に信用されるようになれば、集落の人たちがお米や野菜を届けてくれたりします。

年配の方は憶えていると思いますが、川下のお寺に『堂のおっさん』がいましたね。お葬式があると私のお供をして出かけてました。菅原さんという、とてもおとなしい方でしたが、亡くなった時は世話人さんたちが中心になってお葬式をして、世話人でもあった毛利の石屋さんが言い出して

石塔も建てました。さて、米の収穫が済み、畑のサツマイモなども取り込み麦蒔きも済んで、心身ともにホッとした農閑期のお開帳。

戦後すぐの頃のはやりだったのか、お開帳が近づくと、おばあさん達は夕食後、民謡や踊りのおさらばに集まっていた。

巡礼にはお米持参でしたから、泊まりがけだったのでしようね。泊めてもらったお寺の本堂などで、隠し芸を披露したのではないのでしょうか。

若い人は若い人同士、年配の人は年寄り同士というように、気心の知れた仲間

で連れ立ってお参りしました。日ごとに交代で接待する人は、おいしく蒸かしたサツマイモを持参する人、自

慢の漬物を勧める人などが待っていて、爽やかな秋空の下、素朴ながら心のこもったおもてなしで会話が弾みました。

お寺の過去帳を見れば一目瞭然ですが、昭和三十年代までは亡くなる乳のみ児が随分おりました。

子育て中のお母さんの巡礼ならば、観音さまのお手に結んだ『善の綱』の袋におさい銭を上げながら、先立つたふびんな我が子の冥福をお祈りし、育ち盛りの子どもたちの健康や、序でに、都会や貨物船の『機関場』や、『縄船』などで働く旦那さんの無事もお願ひしたことでしよう。

そして、田の畔のような巡礼道を歩きながら、色々の話に花が咲きました。

『地域の絆の強化策について』などというお役所仕事の物々しい会議などよりも、本音をありのままに話し合う、こういう機会を多くすることの方が遥かに大事だと、近ごろ頻りに思います。

お念仏だけを考えても、お葬式の後先の念仏、家々を回るお彼岸やお盆の念仏、海辺や集落の地先での『浦念仏』など、数年前まで何かにつけて集まること随分ありました。

最近絶滅状態ですね。

お念仏の目的は勿論大事ですが、一緒に集まることで、お互いの元気を確かめあうということが、地域全体の元気につながると思うのですが、如何でしょうか。



鮮色は秋空の青に映えて、あらためて季節のメリハリを思い起こします。このヒガンバナ、大昔にシナ大陸から1個だけ伝わった、という話があるそうですね。証拠は、日本中のヒガンバナの遺伝子がそっくり同じなんだそうです。種子が出来ないから、球根でしか増えないのだそうです。墓地や田畑のあぜや堤防など、人里にしかありません。人の手によって広まったことがわかります。猛毒の植物ですが球根に豊富な澱粉があって、飢饉の時にすり下ろして根気よく水に晒して、澱粉を食ったということです。

2011.10.06 龍渉

は少なくなり、益々景気が悪くなる、私でさえ分かる理屈をマスコミは言いません。手順が逆なんです。増税に反対しているのは、マスコミから独立の雑誌やインターネットです。私の反対の意思表示として、国に納める所得税を減らすため、南房総市といのちの電話に、ドーンと50万円寄附しました。◆季節が来ると、どうしても外せない思いになる野草があります。ヒガンバナ【ヒガンバナ科ヒガンバナ属】もその一つで、これで2回目の登場かと思えます。夏が暑いと開花が遅れるそうですが、今年は半月遅れでした。目が覚めるような、群生する

◆「天下りをやめさせ、国会議員や中央の役人の数や給料を減らし、徹底的に無駄を省けば増税は不要です。だから政権を交代させましょう」こうして出来た民主党政権。「新聞で読んだ」、「テレビが放送した」というと、全部正しいと思いますが、これは間違いですね。政府は「震災のツケを子孫に負わせるわけには行かない」と増税を企んでいます。「困っている人たちのためなら」という国民の善意を、逆手にとった悪質なやりかただと私は思っています。不景気と円高で国民が弱っている時に税金を上げれば、みんなの収入が減って納める税金

余滴

にっぽん人情小噺

三遊亭鳳豊ほうほう

第六十九話 集会場

先日、私の師でもあります三遊亭鳳楽師匠と宮城県
の被災地に行っていました。

場所は、宮城県名取市内、仮設住宅が立ち並ぶ一角の
集会場です。名取市閉上は、ほとんどの家が津波に流さ
れ、たくさんの犠牲者を出したところです。家族を失っ
た人もたくさんいます。そうしたなかで、家を失い、命
から逃げた人たちが、いま、肩を寄せ合って暮らし
ている仮設住宅に、師匠がお邪魔したわけです。

世話人は、鈴木平一さん。お母さんを津波で亡くしま
した。いま、お父さんがこの仮設住宅で暮らしています。
たまたま、うちの師匠の鳳楽が数年前に鈴木さんと知
り合ひまして、以後、毎年一度か二度、仙台で落語会を
させていたでいる関係で、今回の「被災者に笑いを」
というボランティア落語会が開かれたのでございます。

最初は、師匠、ちよっと心配したようです。いくら
「いま、被災者の方々には笑いが必要だ」と言われましても
ね、こんな時に「笑っていいの？」と思えますからね。
そして、当日がやってまいりました。

いやー、暑いなんの。宮城県でも三〇度を超す暑さ
でございましたが、なにしろ節電中でございますから、
冷房が効かない。扇風機の風だけが頼りですね。

みなさん、団扇で顔をあおぎながら、集会場に次々と
集まって見えました。鈴木平一さんの挨拶がありまして、
被災者の皆さんの大きな拍手のなか、机の上に赤い毛氈
を敷き、大きな座布団を置いた即席の高座にあります。
もう、みんな笑顔です。つらいことばかりでしたから、
笑いたくてしかたがないという感じでした。

師匠、めざとく扇風機を見つけてまして、即席でこんな
話をします。

「さやー、皆さん、いま、このもかしこも節電中ではござ
いますね、そこにある扇風機ね、この扇風機がもう売
り切れでデパートの電気用品売り場にも、家電量販店に
もないんだそうですよ。人間の心理というのは、おそろ
しいもので、ひとりが買つと、もう我先に買って、次
から次へと買つていってしまつから、店のほうもいくら
仕入れてもすぐに売れてしまつ。

そんなある日、家の近くの工場が倒産しましてね、ど

ういうわけか、机だの、ロッカーだの、
事務所の備品がゴミ置き場に捨ててあつ
た。ふと、見ますとね、扇風機があるじゃ
ないですか。

いやあ、いま、扇風機が売り切れだとい
うのに、こんなところに捨ててあるのは、
壊れているにちがいないと思つたんです
が、念のため思つて家に持って帰りまし
て、コンセントに差し込んでみたら、なん
と、動くじゃありませんか、これが。あ
あ、もったいない、動くのに何で捨てたん
だろつと考えたら、借金で倒産した会社で
すから、扇風機も首が回らないというわけ
で……」

みんな、笑いながら拍手をしたんです
が、よく見ると、一番前に陣取つていた小
学生が、腹をかかえてひっくり返るよう
に笑っているんですね。それも、本当におか
しそつに。それを見て、また、みんなが一
斉に笑いますから、集会場は一気に笑いの
渦に巻き込まれてしまいました。

「いやあ、このお坊っちゃんのおかげで、
やりやすくなりました。坊っちゃん、あり
がと」

師匠はそう言うと、次の小噺に移りまし
た。

「昔、私たちが子どもの頃、『鶴の恩返
し』というお話を聞きましたね。おじいさ
んが毘にかかった鶴を助けてあげた恩を忘
れずに、鶴が娘姿になって、おじいさんの
家に行き、自分の羽を抜いては美しい織物
を織つて、孝行をしたが、おじいさんが
『決してのぞいてはいけない』という約束
を破つたので、鶴は去つて行つてしまつた
という話ですよ。」

ところが最近では、ちよつと話がちがう
んですね。鶴がおじいさんの家にやってく
る。『おつおつ、そなたは毘にかかった鶴
か』『はい、おじいさんに助けていただ
いので、その恩返しに参りました。』

でも、私の部屋を決してのぞかないでく
ださいね。こゝまでは、同じです。

おじいさん、最初の二、三日は我慢を
いたしておりましたが、四日目、とうと
う我慢ができなくなりまして、『何をし
ているんだろつ』と、鶴のいる部屋をのぞ
いて驚いた。鶴の姿がなかったばかりか、
部屋の中にあつたものがすべてなくなり、
タンスの中のへそくりまで消えていた。
鶴ではなくサギ（詐欺）だったのです」

ワーツという歓声上がり、拍手も起
こりました。でも、クック、クックとお
なかをおさえながら笑いを必死でこらえ
ているさつきの小学生の姿がおもしろく、
また被災者の皆さんからは、大きな笑い
が起こりました。

「受けましたので、鶴の恩返し第二幕で
す」

師匠は、続けます。『どうか、おじい
さん、私の部屋をのぞかないでください
ね』と言われたおじいさん、我慢ができ
なくなつて、鶴の部屋をのぞいて驚きま
した。部屋にあつたものが、すべて段
ボールに詰められているではありませんか。
よく見たら、鶴ではなく、ペリカン
でした」

またドカーンと笑いが起こりました。
もう、少年は我慢ができなくなつたのか、
席から師匠の前に転がっていきましたか
ら、もう会場は大笑いです。涙を拭いて
いるお年寄りもたくさん見受けました。

「こんなに笑つたの、何年ぶりだ？ い
やー」

少年の隣の席のおじいちゃんが、涙を
手でぬぐいながら、大声で言いました。
みんな、笑いながらうなずきました。そ
のおじいちゃんこそ、車で逃げる途中、
奥さんを津波でさらわれた鈴木平一さん
の父・善雄さんでした。

少年の名は、境悠己君。落語が大好き
で、仙台からわざわざおじいちゃんとお

ばあちゃんに連れてきてもらったそつで
す。悠己君、お父さんがいません。きつ
と、彼の心の中の津波を乗り越えた強さ
が、大きな笑いとなって周りの人に共鳴し
たのかも知れません。

落語が終わると、鳳楽師匠は高座の大き
な座布団の上に悠己君を座らせ、自分は後
ろから支えるように座つて記念写真を撮ら
せてくれました。そのカメラの横で、奥さ
んを亡くした善雄さんが、いつまでもいつ
までも拍手を送っていました。

いつものように三遊亭鳳豊さんがMOKU十
月号の読者のためにお書きになったものを、転
載させて戴いております。
今では、この「人情噺」を読みたくて次の号
が待ち遠しいと言つてくる方もあります。
格が違いますから当たり前ではあるのです
が、私としては複雑な気持ちです。

応援、有難うございます

- 千倉栗原俊様 館山島田和子様 白浜中本行政
- 様 館山清野守正様 館山堀口角三様 千葉古
- 谷廣司様 那古佐藤清美様 白浜山口衣子様
- 浅沼義之様 横須賀鈴木世津子様 鬼怒川温泉
- 浅沼克正様 白浜高山寛・中村哲也様 勝山妙
- 典寺様 白浜保田秀子安田幸子様 福島沼崎照
- 夫様 宇都宮中本志津子様 館山佐々木清様
- 館山芝田百合子様 白浜山口三男様 白浜安西
- 穎子様 白浜安西稔様 白浜高田博様 館山安
- 西治子様 白浜河内洋子様 白浜由木尾晋様
- 横須賀吉田松夫様 横須賀鈴木昇様 東京福原保
- 子様 白浜木曾庄右衛門様 館山山川紀代様
- 白浜松井徳房様 東京高橋正夫様 東京浅沼悦
- 郎様 鴨川古泉院様 高崎養報寺様 白浜根本
- 林様 千倉長性寺様 富津田中律子様 富浦森
- 川文字様 富津像法寺同行四名様 三芳溝口清
- 様 白浜小谷よし子様 東京宮内栄三様
- 他に匿名希望の方々。

まだ数えきれずにいますが、知らず知らず貯
まった一円玉を、秤で測るほど沢山お寄せ戴い
た人も何人かおられますし、感想を毎月書いて
下さる方などおられ、本当に有難いことです。

